



久住高原の逢瀬・・・。
南海部 覚悟

大分県中西部、竹田市北西に広がる久住高原の一角です。

小さな湖水の上の、灌木の間に立つ瀟洒なオーベルジュのダイニングで、女刑事カップルとオーナーの老夫婦とが、穏やかに談話しています。



「それであなた達、大分に着任して直ぐ此処に？」

「いえ、4か月になります。大分の県警本部じゃ、何だかスタッフ全員余所々しくて・・・管内で発生する事案は専ら初動捜査ばかりで、担当案件をつけて貰えないんです。」ティーカップを啜りながら玲子が答えます。

「そしたら2日前に、久住高原の周辺で正体不明の生物が出没して、家畜の被害が出てる。長期の出張を伴うかも知れんが、担当案件とするから、所轄と協力して腰を落ち着けて捜査に当たってほしいって、指令を受けたんです。」同じように紅茶を啜りながら、笑子が続けます。

黒い口髭を蓄えた痩せぎすのムッシュウが、紅茶の追加にポットを持って厨房に下がります。

「直ぐには馴染めないかもね・・・大分はまだまだ田舎だから。」

肌触りのよさそうなキルトのカバーに包まり、大きなロッキングチェアに腰を落とした銀髪のマダムが、ニットのひざ掛けの上に、丸々太ったキジトラの頭を擦りながら、話を続けます。

「あなた達二人がカップルだってことも影響してるのかも知れない。偏見を持ちちゃいけないんだけどね・・・国によって多少違うけど、ヨーロッパでも、まだそんな部分は随所に存在するわ。」

「ヨーロッパに住んでましたんですか？」

「——ムッシュウと20年間、パリに住んでたわ。」

「それで此のオーベルジュの建物も・・・。」

「パリから大工さん呼んできて建てて貰ったの、日本のとはだいぶ違うでしょう。」厨房とダイニングのある母屋は、2階がオーナー夫婦の自宅のようで、外壁に石が積まれ、その上に木造の屋根が架けられています。

清潔なタイル張りの床に、年代物の椅子とテーブルが並べられ、ダイニングの部屋の角

には、グラフィイト塗装の重厚な薪ストーブが設えられていました。

インテリアの要素は、統一されたデザインでもなく、オーナー夫婦がその都度買い揃えた家具や小物のようです。

灌木の敷地に点在する“離れ”が、宿泊の客室になる訳ですが、母屋と同様、華美に走らず、大人っぽくシックで、それでいて微笑ましい程度に可愛く、清潔で合理的な趣味に彩られていました。

「―――今日、他のお客さんは？」玲子が尋ねます。

「あなた達だけよ・・・まだ高原は寒いから、今の時期泊り客は少ないわ。」

「正体不明の生物って何のことかねえ？ この辺は、たまに野生のシカやイノシシを見かける程度で、危険な野犬の群れも居ない筈なんだが・・・。」

紅いバンダナで、清潔に頭を被ったムッシュウが、ステンレスの大きなトレーに、追加した紅茶のポットと、鉢に盛ったクッキーを載せて、厨房から上がってきました。

「3Km程北にある牧場の牛舎で、飼っていた牛が襲われたんだそうです。真夜中に牛舎が騒がしいから当直の職員が見に行ったら、3頭が口から泡を吹いて倒れていたようで、明日駐在の巡査と一緒に、話を訊きに行く予定です。」

「―――咬みつかれた痕でもあったのかい？ いっぺんに3頭の牛を倒せるのは、熊くらいのものだろうけど・・・。」

「あら、あなた九州に熊は居ないでしょ？」

驚いて顔を上げるカップルの眼を見ながら、「―――まあ、昭和62年の捕獲例を最後に、確実な生息の証拠がないから絶滅したってことになってるが、まだ分らんよ。竹田や日田の林業業者の話を訊くと、幾らでも目撃例があるようだ。」

「―――熊ですか。」ティーカップから立ち昇る湯気の揺らぎを見詰めながら、玲子は携帯を許された腰のリボルバーにそっと手を添えます。

同じダイニングでのディナーは、オーナー夫婦と共に4人の和やかなものになりました。

以下、ムッシュウが腕を揮ったフルコースです。

(モッツァレラチーズと野菜のコンフィバジルソース、ジャガイモと白ネギの冷静スープ、鯛のポワレに海老のソース、牛ヒレのソテーにグラタン・ドフィーヌ添え、デザートはマルカルポーネの無花果のセキャラメルソース)

ワインも勿論、ナパバレーの“白”を頂きました。

襲われた牛を診た獣医を、牧場の事務所に訪ねます。

「先生が診たときは、既に3頭とも死んでいたんですか？」

何時もの様に、大きなシステム手帳を構えながら、笑子が尋ねます。

若草色の上下繋ぎの作業服に、長い聴診器を首から下げた大柄な獣医が、「———いえ、1頭はまだ生きていました。ただもう息も絶え絶えで・・・胃の内容物を胃液と共に吐瀉して、その一部を気管に詰まらせたのが死因ですが、よく見ると体中傷だらけで・・・。」

「襲ってきた生物由来の傷ですか？」

「牛舎内部の柵や設備が、大きな力で曲げられたり折られたりしています。死んだ3頭が入っていた区画以外も同様で、一様に酷く破壊されていて、生き残った他の牛の体にも同様の傷が散見されますので、深夜何らかの原因で、牛舎内全ての牛がパニックに陥ったんだと思います。暗闇の中、恐怖から逃れるため、牛たちは狭い牛舎を死に物狂いで走り回った、仕切柵の彼方此方に体をぶつけ傷を作りながら・・・突然大量のアドレナリンの分泌に、心臓や肺が対応できなかった3頭が、胃の内容物を吐き戻しながら、窒息したというのが実情だと思います。」

「パニックの原因が、正体不明の生物だと？」

牧場のオーナーだという、革のエルボーパッチ付ジャケットを纏った初老の男性が前に進み出て、「事務所においても、分からんじゃろうが。現場の牛舎を見ちよくれえ、そのままにしちよるけえ。」

アポクリンの強い匂いに咳込みながら、待機していた駐在所の巡査に声を掛け牛舎の入口へ進むと、無残に捻じ曲げられたスチール製の仕切柵が見えてきました。天井から吊り下げられた無数の樹脂パイプや蛇腹管も、途中で引き裂かれて床に垂れ下がっています。

「———生き残った牛は？」

「この上の放牧場に放しちよるがな。」オーナーが答えます。

「床の敷き藁をよう見ちよくれえ、波んごとうねっちよるじゃろうが、牛が走りもうてもこうはならん、何かが這いずりもうた跡じゃあが、壁んきわの藁が積み重のうた場所じゃ縦向きに渦もうて続いちよる、まるでサーフィンのパイプラインじゃが・・・。この周りで、他ん業者の牧場も含めてもう15頭が死んじよる、話訊くとみな同じ状況じゃが、大蛇ん群れでも傍に居るんじゃねえかゆうちよるんよ。」

手持ちの一眼レフで、盛んに写真を撮っていた笑子が、藁の下から何やら光るものを摘まみあげて、「———牧場で使う機械の部品でしょうか？」

直径20cm、厚さ5cm程の金属のリングです、外側の表面に螺旋状の歯が取り巻いてい

ます。

手に取ったオーナーが、「何かの歯車じゃろうが、歯が異常に大きいのを、まるでドリルのブレードじゃが・・・。」

そう云いながら近くにいた牛舎のスタッフに渡すと、「うちで使ってる部品じゃありませんよ、ボスのこんなに大きなギヤは見たことありません。トラックやトラクターのミッションケース分解すれば、出てくるかも知れませんが・・・。」

「竹田署を經由して鑑識に廻してみます、何の部品なのか分かりますか？」

「直接、現場を視に来てくれんのかいね？あんたら二人だけじゃ、分からんじゃろがぁ！」

言葉の背後に牧場オーナーの苛立ちが感じられます。

「直接人間が被傷した事件・事故であれば、鑑識や私達のような刑事も多数臨場しますが、今のところ・・・。」

「じゃあんたら、何しに来たん？」

「ちょっと特殊な事案ですので、その辺りを見極めるよう云われています。もし、熊や野犬のような危険な動物の仕業であれば、それなりの対応を取らなければなりませんので・・・。」



オーベルジュに帰り、猫脚のバスタブに白い体を横たえていると、笑子の小麦色のそれが入ってきました。

「一緒に良いですか？」

「いいわよ、バスタブも大きいし・・・。」

「酷い匂いでしたね、牧場の牛舎。」

「事件解決して、県警本部に帰るころには、二人とも体に染みついているかも知れないわね。」

「でも、竹田署から刑事のひとりもよこさないって、どう思います？」

「結局、厄介払いなのよ。熊にでも食われてしまえばいいって考えてんじゃないの、県警本部の幹部。」

「牧場オーナーの不満も、分かりますよね。」

真っ直ぐ伸ばした両手が笑子の乳房に届きます。

俯せに腰を入れ替えると、首に手を廻し、白い膨らみを小麦色のそれに重ね合せました

。

早春の靄が高原の木立の間に漂う静寂の中、ムッシュウの“シトロエン**2CV**”が独特のエンジン音を、朝晴れの空に響かせます。

「こんな早くから、お出かけですか？」笑子が離れの開き窓から爽やかに顔を出して声を掛けます。

「大分まで食材の買い出し・・・朝食はマダムに云って！」

「私達も仕事です。今日は牧場の放牧地の方を、車で視て廻ります！」

「最近の車と違って、出掛ける時は早起きして暖気しないといけないからねえ、手が掛かるよ・・・。」

オーベルジュの北面に、屏風のように連なるくじゅう連山は、九州本土最高峰の中岳(1,791m)を主峰とする大火山群の総称で、北麓の飯田高原、南麓の久住高原を擁す我国有数の酪農・温泉地帯であり、阿蘇くじゅう国立公園に属します。

周辺の様々な地名表記に“九重”と“久住”が混在しますが、一般に火山群北側の九重町(このえまち)周辺を“九重”、南側の久住町(くじゅうまち)周辺を“久住”と称しているようで、最近では混乱を避けるため“くじゅう”と、かな表記される場合が多いようです。



雄大な裾野の、放牧地の草原を東西に貫く久住高原ロードパークを、カップルの車が東から西へと駆け抜けます。

午前の瑞々しい陽光が、山塊のディティールを明瞭に照らし出し、大気に清々しさが溢れます。

未だこの時期、牧草も伸びきらず牛の放牧には多少早過ぎるのですが、所々に管理番号を大きくスプレーされた、肉牛の紅い背中が散見されます。

「―――気持ちいいわね！空気に生気がある、こんな処ならストレスも溜まらない、何年でも生きていられそう！」

助手席の玲子が甲高い声を挙げます。

「あれえ？着任前は散々に云ってたじゃないですか大分のこと、電気も来てない田舎だって―――。」

「―――田舎には違いないわ。でも、いい田舎！」

途中、廃業したレストランの駐車場に車を停めて、展望台から阿蘇五岳を遠望していると、笑子がスマホを操作しながら、「本部の科捜研からメールが届いています。例の歯車に関してのようですよ。」

「―――早いわね、余程する事ないのね！」

「機械部品の歯車ではないようです。3Dメタルプリンターで単一積層製造されたアルミ合金製のようで、ギヤとしての製品精度もそれ程高くなく、工業機械部品ではあり得ない。使用用途も不明と結んでいます。」

「―――何よ、結局何も解らないんじゃないの！」

眼下に広がる広大な草原を、ロードパークと並行して延びる国道442号線から分岐した一本の取り付け道路の奥に、重厚な佇まいの洋館が見えます。

笑子の一眼レフでズームしてよく見ると、広い前庭に灌木が拡がり、スレート屋根の所々に雑草が延びているので、時を重ねた廃屋のようです。

更にズームして周囲を見渡すと、建物の裏から湯気が上がって、何やらキラキラしたものが蠢いてるように思えます。

「笑ちゃん、竹田署に連絡してあの廃屋調べて貰って、家宅捜査が出来るなら頼んでみて！」

「―――どうかしたんですか？」

「古い廃屋なのに、取り付け道路に轍があるわ。それに、周りの雑木林が何だか変よ・・・。」

竹田署から直ぐに回答メールがあり、笑子が読み上げます。

（ある資産家の別荘で、30年前に本人が他界した折、相続税の物納として国に納められた。競売で買い手が付かなかった為、今でも廃屋として国の所有物である。竹田市が国から依頼されて管理しているので、家宅捜査が必要なら、最寄りの久住総合支所から担当者を派遣する。）

取り付け道路の入り口で、一時間ほど待っていると、牛舎で一緒だった駐在所の巡査と共に市の担当職員がやってきました。

「どの位の頻度で、見廻ってるんですか？」

笑子が例によって、手帳を構えながら質問します。

「年に4回です、県境の一番遠方ですから、頻繁には職員の手配も出来ません。」

そう云いながら、取り付け道路入口の鉄柵の錠を開けると、道路を被う叢に、2条の轍

が奥に続いています。

カップルも職員の4WDに乗り換え、ダートとなり果てた取り付け道路を4人で進みます。

「昔は、入り口に鉄柵も無かったものですから、若い連中が車で乗り付けて、建物の中で一晩中騒ぐこともあったようですが、最近はそんなことも聞かなくなって・・・これ車の轍じゃないですね、ほらその先で交叉していますよ！」

よく見ると、道路上の背の高い雑草が、轍と見えた位置で縦向きに渦を巻いて交叉しながら続いていて、牧場主からパイプラインと表現された牛舎の敷き藁と同じ形です。車を降りて周囲を見渡すと、道路から外れた灌木の中の叢にも、同じような渦が無数に延びて、建物の裏が一段下がって小さな池になっているようで、その方向から電子音ノイズのような、微かな音が聞こえてきます。

「何か、這った跡でしょうか？こんなの初めてです！」
ハンドルを持つ職員が、気味悪そうに身を縮めます。



建物のポーチに車を止め、玄関の錠を開けて中に入ると、ホールと一体になった広いリビングの、黴臭い空気と纏わりつく湿気とが4人を包み込みます。

「——荒らされた様子は無いわね。でも何だか、異常に暑くない？2階に部屋は？」

「寝室が三つあります、でも所々床が腐ってますから、上がるのは危険ですよ。」

「地下は無いんですか？」笑子が下りの階段を指差しながら尋ねます。

「小さなトレーニングジムと温泉を引き込んだ浴室があります。」

「視ていいですか？」

「大丈夫です——。」

ジムのガラス戸を開けると、濃密な湯気が溢れ出てきました。

「温泉だけは、まだ生きていますね……。」

湯気に霞む視界を何とか見通しながら、玲子が呟きます。

ジムの先はガラス窓で隔てたタイル張りの屋外テラスで、裏の池へと続いているようです。

「——変だなあ？」

「どうしました？」

「温泉は当の昔に枯渇している筈なんですけど……それが故に競売で落札されなかったって訊いています。私も3年間管理していますが、湯が来てないから温泉設備をいじった記憶が有りません。」

「浴室から湯気が来てるんじゃないですか！テラスの窓ガラスが割れて、そこから池の蒸気が入って来てるようです！」

寡黙を通していた駐在所の巡査が大声を上げ、同時に腰のホルダーからリボルバーを取り出し、眼の高さに構えて腰を屈めます。

「―――どうしました！」笑子が自分のホルダーに手を添えながら尋ねます。

「池の中を、何かが動いたものですから……。」

慎重に歩を進め、ガラスドアを開けて屋外テラスに足を踏み入れると、タイル張りの床に所々引っ掻き傷のような痕が目立ち、澱んだ池の水面には濃密な水蒸気が漂っています。

「やっぱり変ですよ、前回(3か月前)に来たときには、窓ガラスも割れてなかったし、床に傷も無かった、池に湯気なんか上がってなかったですよ！」

職員が叫んだそのときでした―――。

周囲に継続する電子音ノイズが急に大きくなり、池の中央が俄かに波立って渦を巻いて此方に近付いて来ます。

泡立つ水面の下から紅い光が点滅し、鈍い金属の光沢を目撃したその直後、テラスの縁の水面が一気に盛り上がると、5mもある蛇のような長い物体が這い上がってきました。

丸い胴体の側面が、複雑に旋回しています。

紅く点滅する先端が鎌首をもたげてこっちを睨んだ瞬間、巡査が発砲し玲子と笑子がそれに続きます。

ラグビーボールのような尖った頭部が弾け飛び、側面の旋回が停止して、同時に耳障りなノイズも無くなって、テラスが静寂に包まれます。

再びノイズが大きくなり、池に視線を移すと、対岸の汀から複数のそれが這い上がって叢に姿を消しました。

後に残されたのは、タイルの上に長々と全身を晒した一匹の怪物でした。

金属光沢の濡れた体から、湯気が立ち上ります。特にその中央部は熱く灼熱して触れないほどです。

直径20cm程の金属の球体が、真珠のネックレスのように連なった構造で、球体の赤道の位置に、牛舎で見つけたギヤと同じものが一對で取り巻いています。旋回していたのはそのギヤで、一對2個が逆方向に廻っていました。

巡査のリボルバーで破壊された頭部は、尖ったカバーが粉碎され、どろっとした液体と共に、複雑な電子基板が露出しています。

心臓の鼓動のような紅い光の点滅が、弱々しく虚ろになり、やがて消えてしまいました。



2時間後には、機動隊による規制線を取り囲むように、何処からか訊きつけたメディアのスタッフ・機材とで、廃屋の周囲は騒然となりました。

二日後の朝一番、竹田署の捜査会議です。

県警本部から、科捜研のスタッフが参加しています。

「あれは一体何なんだ？機械でできた蛇か？」警視正の警察署長が口火を切ります。

「——仰る通り、蛇のロボットと云って支障ないかと思います。」科捜研の担当者が説明を始めます。



「直径180mmのアルミ合金製半球型フレーム一对の間に、直径190mmのリングモーター2基を重ねて挟み込んでいます。モーターには、先日黒木警部から提出されたリング状のヘリカルギアが固定され、其々逆に回転させてトルクを打ち消します。ヘリカルギアとはギアの回転軸に対して、斜めに歯が切られた歯車で、今回その歯の角度・大きさから、回転力を伝えるギアではなく、本体に軸方向の力を発生させる推進器だと判断しました。」

「——どういう事だ？」

「本体周囲の土や草、水や砂に歯を喰い込ませて回転させることで全体が前進します。球型フレームとリングモーター、推進器を1ユニットとして、25ユニットがボールジョイントで繋がり、全体で5,500mmの長さがあります。」

「ボールジョイントの周りには、伸縮式のリンク4本があってユニットどうしを牽引し、油圧を使って丁度胃カメラの頭部のように、全体を曲げることが出来ます。」

「蛇のように、体をくねらせる訳だな・・・動力と制御は？」

「動力に関しては、高度な専門分野となりますので、協力頂いた大分大学理学研究所の現時点での見解を説明いたします。」

「当該ロボットの動力は、六フッ化タングステン（UF₆）を核燃料とする安定核核分裂によるもので、回転式容積機関（バンケル型ロータリーエンジン）によって回転動力を取得、ジェネレーターで電気エネルギーに変換するシステムです。ご存知のように、安定核核分裂は気化した重金属を急激に圧縮することによって実現します。一般に揮発しやすいフッ素との化合物を使用し、特定の位置での臨界状態を維持しながら、全体を超臨界とさせない為に、核燃料ガスを高圧域と低圧域の間、高速で流動させる必要があります。その為、旧来の内燃機関の技術が様々試されてきました。ただし、其々のシステムで一長

一短あり、確立された統一解は未だ取得されていないのが現実です。今回、ロータリーエンジンを選択したのはある意味画期的で、安定核分裂に纏わる多くの問題が見事に解決されているようです。ただし、決定的な短所がひとつあり、それは発生する熱の処理です。今回のロボットを構成する25個のユニットの内、実に20個がオイルを充填した冷却器に他なりません。これら20個に外気や水を通し、オイルを循環させて、中心部のユニットにある核分裂機関を絶えず冷却しているようです。」

「じゃ、池の水面から湯気が上がっていたのは、其の為か・・・温泉が出てた訳じゃないのか？」

「あの地域は、40年前に源泉が枯渇しちよります。衛星写真の解析でん、地面が冷え切っちゃると訊いちよります。」

竹田署最古参と云われる白髪の副署長が口を挿んだ後、科捜研担当者が更に続けます。

「制御に関しては、両端のユニットにAIシステムとして集約されています。尖った先端部に様々なセンサーが配置され、その背後にあるプロセッサによって、全体が制御されているようです。プロセッサに内蔵されるプログラムを、同様に大分大学理学研究所で現在解析中ですが、それによってこのロボットを誰が何の目的で造ったのかが、分かるのではないかと考えます。」

「現時点での研究所の見解は無いのか？」

「何分、形のないプログラムですから・・・。」



「2点質問があります！」玲子が手を上げます。

「人間や家畜が当該ロボットに遭遇した場合、攻撃されて被傷するような事は無いのでしょうか？また、被害を受けた牛の死因は、自らのアドレナリン分泌による窒息死と診断されていますが、なぜロボットが牛舎に集まるのでしょうか？なぜ深夜なんのでしょうか？」

「人や家畜に危害を与えうる、武器のような構造は発見されていません。推進器の歯が強く皮膚に当たれば、相応の擦過傷が生じるとは思いますが・・・なぜ牛舎に集まるのか、なぜ夜なのかについては、プログラムの解析を待つしかないと思います。誰かに遠隔操作されているのかも知れませんが、自律して行動している可能性もあります。ひ

とつと言えるのは、様々なセンサーのうち突出して高性能なのが赤外線センサーでした。冷涼な夜の草原の中で、明瞭な発熱源として牛舎の牛の群れは、最も感知されやすい対象かと思います。」

「放射能被曝は、気にせんでいいのか？」署長が付け加えます。

「安定核核分裂の反応後生成物に、放射性元素は存在しません。その点は御心配に及びません。」

「それともうひとつ、云い忘れていましたが両端のユニットの尖った先端部には、開閉式のアイボルトが其々設置されていました。」

「アイボルト？」玲子が復唱します。

「先端がリング状になった牽引用のボルトです、車の付属工具にも付いています。何かに牽引される為か、何かを牽引するのか、用途は不明です。」

廃屋の事件後、久住高原にメディアが大挙して押しかけました。

——正体不明の機械蛇、牧場を襲う！

——夜な夜な蠢く、大草原の恐怖！

——幽玄な廃墟を水面に映す、大蛇の池！

竹田署での会議の内容が、ほゞ其のままメディアに流出したのをきっかけに、久住高原中の牧場、廃屋、湖水に片端から常時監視の固定カメラが設置され、附近の駐車場には中継車が常駐し、高原の国道に報道車両が右往左往する有様です。

警察車両だと分かると、直ぐに報道車両の追跡を受けるので、カップルもオーベルジュに待機して、緊急の入電を待っている状態です。

ロボットの写真を興味深げに見ながら、ムッシュウが呟きます。

「——池の中には何匹くらい居たの？」

「正確には分かりませんが、這い上がって逃げたのが10匹くらいだと思います。」笑子が答えます。

「両端部のカバーに何らかの文字列がエッチングされていたようなんですが、磨滅して“No.8”としか読み取れなかったようです。」

「放つといても、人を襲ったりはしないんだろう？」

「牛が驚いて死ぬんなら、農家としちゃ死活問題でしょう？」

マダムが真剣な表情で返します。

「その内収まるよ、機械ならエネルギーが無くなりゃ御釈迦じゃないか……。」

「核エネルギーですから、常時動き続けても30年は活動し続けられるそうです。」

「そりゃ大変だ——。」

「警察は、機械蛇が出てくるのを待ってるだけ？」

「捜査の為に動き回れば大騒ぎになりますので……深い池に潜んでいるんじゃ、探しようもありませんし。」

「でも、この歯車みたいのが推進器なら、どんな悪路だって進めるんだろ？もっと大きく造って、球体フレームの中に人が乗れるようになれば……。」

「——海洋、河川、山岳、草原、密林、砂漠、氷原、沼沢、洞窟 あらゆる環境をものもしない、万能車両？」玲子が話を受けます。

「もっと小さく作れば、どんな小さな隙間にも入れて……。」

「幼虫型の探査ロボット——。」今度は笑子が受けます。

「その手の機械に関心があるのは？」

「別府と由布院、玖珠に陸上自衛隊の駐屯地がある……。演習場なら米軍も使用するの、日出生台と十文字原にある！」

「―――ロボット兵器だって云うの？」呆れた表情でマダムが受けます。

お昼過ぎから早春の青空を覆い隠す様に、俄かに雨雲が広がってきました。
湿気を帯びた西風が、草原の肌を吹き抜けます。

「今晚から大雨だそうだ、この季節に珍しいよ。」

厨房カウンターの上の、時代がかった真空管ラヂオのチューニングを調整しながらムッシュウが呟きます。

その時、玲子の携帯にTELが入りました。

「―――駐在所の巡査からよ、県境のゴルフ場の池から、蒸気が上がってるんですって、直ぐ来てほしいって！」

県境のゴルフ場は、全体が古い火口の中にありました。

問題の池も、池と呼ぶには遥かに広大で、中央に島を持つ立派な火口湖に違いありません。

島を蔽うように巨大なクラブハウスが聳え、外周の汀との間に突き出した無数の半島が、グリーン及びティーグラウンドとして整備されています。

ホールの過半が池越えの難ホールであり、上級者向けコースとして、九州でも有名なゴルフリンクスした。

何処から訊きつけたのか、既に多くのメディアがクラブハウスに詰めかけています。



低温多湿な空気が火口湖を被い、湖一面に薄っすらと靄が立ち昇って、その靄を湖面に押し戻す様に強い雨が降ってきました。

「何処から蒸気が出てるの？」玲子が巡査に確認します。

「湖面に手を浸してみてください・・・生温かいでしょ。先月半ばまで天然のスケートリンクとして使っていた池ですよ。」

東京のメディアの一団が、池に掛かる橋の上から湖面を撮影しています。

機材の側面に“サーモグラフィ”という大きなイニシャルが見て取れます。

やがて竹田署のスタッフが到着し、池の汀に規制線を張りメディアを排除しかけたその時、「いたぞ！あれだ、機械蛇だ！」

橋の上から大声が上がり人々が走り出します。湖面を見ると並行した3条の白い航跡がさざ波を突き通して、橋脚の袂に延びていきます。

橋の真下を通過した辺りで、少しずつ細くなり、やがて夕暮の湖面に消えてなくなりました。

吹き通す湿った風に激しさが加わります。湖面に白波が立ち始め、叩きつける雨も一層強くなり、くじゅう連山が雨雲に覆われて、完全に見えなくなりました。

クラブハウスの中は、雨を避けたメディアスタッフや、警察官、ラウンド中の客でごった返していました。

竹田警察署長の指示で、警察官は雨が止むのを待って池を搜索、その間クラブハウスに待機することになりました。

窓を閉め切った建物の中までも、激しい雨音が聞えてきます。

3階の展望レストランの巨大なガラスウォールから、暗くなったコースを見下ろすと、フェアウェイの叢が一面水浸し、水没したサンドバンカーから砂が溢れて廻りに拡がっています。

空は黒々と何も見えません、一瞬稲妻が光って暗い雲の底がおどろおどろしく渦巻いているのが確認されます。



ゴルフ場のオーナーが記者会見をすると云うので、3階にいた全員が下階に降り、残されたのは駐在所の巡査とカップルのみ、笑子が自販機から3人分のコーヒーをトレーに乗せて運んできます。

「この前廃屋から逃げ出したのは、10匹程だったと思うけど、それだけでこの大きな池の水を温められるのかしら？」

「もっと多数棲みついでるって云うんですか？」無口な巡査がコーヒーを啜りながら呟きます。

「先月半ばまでスケートリンクに使用した後、ゴルフ場としてオープンするまで、此処は如何してたの？」

「コースの彼方此方にまだ雪が残っていますから、それを融かしてグリーンやフェアウェイを整備するのに、1か月程度掛かるって訊いてます。」

「その頃はまだ池の水は冷たかったのかしら？」

「池の異変についてゴルフ場から連絡を受けたのは、2週間前のオープン直後です。ラウンド中の客が、水面を大きな生き物が泳いでるのを見たというのが最初でした。ゴルフ場備え付けのゴムボートで、隈無く捜査したんですが見つかりませんでした。その時池の水がなんだか生温いと思ったんです、署に戻って報告すると、冬季に凍結する池で火山活動の兆候もない、温暖化の影響で、春から急速に水温が上がって、小魚の活動

も盛んになり、その群れが泳ぐのをゴルフ客が見間違えたんだろうということになって・・・。」

「じゃ、2週間前から棲みついていたって事ですか？」笑子が確認します。

「2週間以上前に誰かが久住高原に放したのよ。ここの池は久住高原で一番大きいそうだから、冷却の為の水域を求めて移動した結果、此処に集まったんじゃないかしら。」

「牧場の牛を襲ったり、廃屋の池に現れたりしたのも、その移動中の出来事？」

「冷涼な環境を好むとすれば、移動は夜になるわ、本体の大きさの割には人々の目撃例が少ないのは、きっとその為ね！」

——その時です！

窓を透した雨音が一瞬止んだと思ったその刹那、立木を割り裂くような乾いた轟音と共に、強い振動が建物を襲ってきました。

3階建鉄筋コンクリートのクラブハウスが容赦なく揺さぶられます。

「——地震です、先輩！」柱に掴まりながら笑子が叫び、巡查と玲子も床に蹲って、必死に耐えています。

ひと際強い一撃で、レストランのガラスウォールが粉碎され、体が弾け飛ばされそうになります。

「違うわ笑ちゃん！何か大きなものが建物にぶつかってる！」

やがて揺れが収まり、周囲の轟音も落ち着くと、ガラスの破片に気を遣いながら、笑子が階段へと這い寄り、下階を覗き込んで肝を潰しました。

「せんぱあい！下階がありません！泥水が渦を巻いていまあす！」

隣で同じように覗き込んだ巡查が、「——土石流だ、大変だあ！」

小一時間が経過しました。

下階の泥流に向けて叫ぶ3人の声が、クラブハウスに空しく響きます。

硝子を失ったレストランの窓から見える雨空に、夕日の紅が斜めに差し込み、宗教絵画のような荘厳さを醸し出しています。

あれほど激しく降り続いた大雨も、既にほゞ上がっていました。

「下にいた人たち一体どうなったのよう！みんな流されちゃったの？誰も返事をしないっておかしいじゃない！」

ヒステリックに玲子が叫びます。

長い沈黙の後、憔悴しきった表情で笑子が立ち上がり、「——仕方ありません先輩、ともかく上に上りましょう、雨も上がったようだし、やがて救助のヘリが来ます、屋上に出て手を振り続けないと・・・。」

金属が強く擦れる嫌な音がして、建物全体が軋みます、柱の付け根の天井から、コンクリートの破片がパラパラ落ちてきて・・・。

「——いかん！倒壊する、そこの窓から飛び込んで！」

云うが早いか、巡査の両腕がカップルの背中を突いて、粉碎されたガラスウォールの外に身を躍らせます。

泥水の中に3人の姿が消えた直後、クラブハウスが轟音を立てて倒壊してしまいました。

褐色の泥水の中で、息が切れそうになり慌てて水面に顔を出すと、強い力で両腕を引っぱられました。

ゴムボートの上から、笑子と巡査が必死で体を引き上げてくれます。

「――助かったの私達！」思わず叫びます。

「窓の下にこのボートが見えたものですから、それを目指して飛び込みました。恐らく1階が土石流に襲われた時、外に流されたんでしょう。」

答える巡査の背後には、崩壊して見る影も無くなったクラブハウスの残骸が、黒々と哀しげに横たわります。



暗くなった遠方を見透かすと、旧火口全域が一面泥水に覆われているようで、水面から草原の縁が僅かに見えるだけでゴルフ場の名残を確認することは、最早できません。

巡査が、ボートに付いているオールを外して必死に漕ぎ始めました。

「どうしたの？慌てる必要があるの！」

「南側の火口縁が見えないでしょ、草原は南側が低いんです、もしあそこが決壊すれば、また流れが強くなって・・・。」

笑子が、もう一つのオールを外して一心に漕ぎ始めます。

「――駄目だあ、瓦礫が絡んで上手く漕げない！」

その時、聞き覚えのある独特の電子音ノイズが水中から響いてきて、機械蛇の長い胴体がゴムボートに沿うように浮上してきました。

終端部のアイボルトをひけらかすように立ち上げた後、体をくねらせながらボートの廻りを一周します。

5回ほどそれを繰り返した後、玲子が、「ねえ、何処かにロープない？」

巡査がボートに付属の繫留用ロープを取り出すと、「それをあの輪っかに括り付けて！」

怪訝な顔で、恐る々機械蛇にロープを括りつけると、瓦礫の塊を器用にかわしながら、快調なスピードで3人のボートを牽引し始めました。

火口の縁の汀を乗り越えると、其のまま草原を進みます。

土石流が流れ下り、無数の筋状ガレ場と化した不整地をものともせず、牽引するゴムボ

ートを弾ませながら、ずんずん進みます。

やがて、夜の帳が降りた草原の暗闇に、一本の光の筋が見えてきました。

大きくカーブを描きながら東西に延び、よく見ると赤や青の回転灯が混在し、無数のサイレンを反響させながら近づいて来ます。

道路の手前で急カーブを切ると、ゴムボートが横転して乗っていた3人が路面に投げ出されます。

「——もうっ！乱暴なんだからあ！」

笑子が振り返りざま手に掴んだ砂を機械蛇に投げつけると、それに応答する様に両端を紅く点滅させ、ボートを引き摺ったまま叢に消えてしまいました。

懐かしい2CVのエンジン音が聞こえて、老夫婦が暗い道路に降りてきます。

「——生きていたか君たち、良かったあ！」

「雨が降りやんだから、心配になって捜しに来たのよ！」

ムッシュウと、マダムの穏やかな優しい顔が、そこにありました。

竹田市役所久住支所に設置された当日の雨量計データは、気象庁の担当官をも驚愕させる異常なものでした。

降り始めから、降り終るまで約4時間の総雨量が500mmを越え、特に一時間雨量の最大値が(210mm)で、1982年の長崎大水害の日本記録(187mm)を大きく更新しました。

くじゅう連山の頂上付近に残っていた残雪が、雨と共に一気に融けて土石流を誘発したのが、被害が広がる一因となったようで、広大な久住高原の至る所で、痛々しい爪痕が美しい草原を破壊し尽くしました。

農業・林業・畜産業での損害は甚大で、観光を含めた被害総額は当面集計のしようもありません。

雨の量、物的被害の大きさに比して、人的被害は最小限で留まりました。

死者数はゼロ、被傷者はクラブハウスで土石流に流された62名だけで、多くは流木や瓦礫と接触した際の、擦過傷等軽傷でした。

建物の北側に耐力壁が連続して存在し、1階の記者会見場を大きな岩や流木の直撃から守ったようです。建物はその後、この耐力壁の破壊が進み倒壊しました。

また、土石流に襲われた直後、100匹近い機械蛇が建物の廻りに集まり、多くの被傷者はこれに掴まり脱出しました。

3日後の新聞の見出しです。

——レスキュー蛇 **62名**の命を救う！

―――救助ロボットの新形態、機械蛇！

―――災害日本に神の使者、オーラ輝く機械蛇！

一か月後、休暇を取ったカップルが、再び久住高原のオーベルジュを訪れています。

「それで如何？あの機械蛇の生みの親と、草原に放った下手人の目途は附いたの？」いつものロッキングチェアに腰を落とし込んだマダムが、キジトラの顎を擦りながら、尋ねます。

「それがまだ分からないんです。大分大学での制御プログラムの解析は完了したんですが、編集源を特定するには至らなかったようで・・・。」

「皆目見当がつかないって云うのが実情みたいですよ。機械蛇の本体を構成するアルミ合金の成分からも、特別なものは出なかったみたいで。」

玲子と笑子が順に答えます。

「どうしてクラブハウスに居た人間を助けたのかしら？」

「制御プログラムの中の、ある部分が稼働したからと訊いています。先端部にある様々なセンサーで人間の存在を認識し、同時に生死を判定する。生存の場合、周囲の環境からレスキューの必要性を判断する、必要と判断した場合、与えられた能力の範囲内で、レスキューする人間の生命を維持しながら安全な環境まで牽引する。」

「―――何だか、まどろっこしいわね。」

「レスキュー完了の判定は、安全な環境下にある他の人間の近傍まで、牽引することなんだそうです。」

「だから、私達3人は道路に放り出されたんですよ、酷いと思いません！」

「―――助ける人間が気絶してる場合は？」

「両端のアイボルトに3m程のケーブルが続いていて、機械蛇が人間の胴体を一周すれば、自動的にロックされるようになってるんですって。」

「全て“遺伝的アルゴリズム”が実装された進化的人工知能によって、判定、判断、実行されるって説明されました。」

「ロボットは、人間に加えられる危険を看過することによって、人間に危害を及ぼしてはならない・・・アイザック・アシモフ“ロボット3原則”の第一法則だな。」

湯気の立つパンキンポタージュをトレーに乗せながら、ムッシュウが呟きます。

「あなた、遺伝的アルゴリズムって何のこと？」

「人工知能の、近似解算定法のひとつだろ。必ずしも厳密解を必要としない制御の場合、“選択”“交叉”“突然変異”といった遺伝的操作で、精度の高い近似解が得られるんだ。」

「ムッシュウ、人工知能に詳しいんですね！」

「京都の常連客からの、受け売りなのよ・・・。」

「―――京都？」

「毎年、夏休みに来てくれるんだよ。京都の山奥の大地主らしいんだが、プログラミングやメカトロニクスに詳しい、今は丹波の山奥で、共同生活しながら愛玩用ロボットや汎用ロボットの制作、販売、制御プログラムの開発、頒布をやってるらしい。」

「うちのオーベルジュの、ホームページやブログも作ってくれたのよ。」

「———なんて方ですか？」

「顧客の個人情報だから名前は教えられないけど、昭和の時代に長く総理大臣を務めた、有名な政治家と同じ苗字よ。」



ダイニングの窓から、何時ものように見上げるくじゅう連山の山肌には、幾筋もの土石流の傷跡が、痛々しげに残ります。

折からの夕陽を受けて、真っ赤に染まった山々が、満身創痍の悲壮感を一層深めているようでした。

哀しそうな四つの眼で見つめるカップルに対して、ムッシュウが、「自然は強かだよ、5年もすればまた元通りさ、何も心配する必要はない……。」

「人間も同じよ、そんな場所で店を修理して、また商売始めるんだから……。」マダムが続けます。

ダイニングで夕食を終えて、自分たちの離れに引き上げる小路の袂から、あの電子音ノイズが聞こえてきます。

ぎょっとして暗闇を見透かすと、小路を斜めに横断して、機械蛇が長々と横たわり、鎌首を持ち上げてこちらを見ているようです。

カップルが顔を近づけても、微動だにしません。

鎌首の側面にエッチングタイプが微かに読み取れます“ **Product by Satou Factory Kyoto Serial No.81**”。

次の瞬間ヘリカルギアが旋回し、足元の土手を下りて眼下の湖水に姿を消してしまいました。

ふたりが離れに着くと、「———見なかった事にしようね、笑ちゃん。」

「そうですね、これ以上詮索する必要もないし———。」

全裸になって抱き合います、其のまま猫脚のバスタブに二人して横たわると、「まだ土石流の砂が、彼方此方の穴から出てくるんですよ・・・。」

「分かったわ、大事なところからほじり出してあげる。さあ、お尻上げなさい・・・。」カップルの甘い会話がいつまでも続きます。

———終わり。

以上、全てフィクションであり、実在の個人、団体等と一切の関わりは有りません。悪しからずご了承下さい。

尚、添付した写真は【PhotoAC】から転載させて頂きました。

久住高原の逢瀬・・・。

<http://p.booklog.jp/book/122881>

著者：南海部 覚悟

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/tumanaya/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/122881>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト